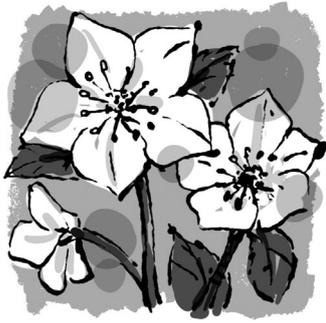


本年はオリンピックイヤーです。七月二十六日から八月十一日にかけてフランス・パリで開催される第三十三回夏季オリンピック競技大会は、一万人以上のアスリートと二百を超える代表団が参加予定で、三十二競技・三百以上の種目が行なわれます。「近代オリンピックの父」と呼ばれるピエール・ド・クーベルタン男爵（フランス）は、自身の見聞に基づく経験則から、スポーツの効用として、「教育に加え国際協力と平和を見出し、古代オリンピックの近代における復活」を提唱しました。クーベルタン男爵の精力的な活動が実り、一八九六年に古代オリンピック発祥の地であるギリシャのアテネで第一回大会が開催されたのでした。

平和の祭典として始まった近代オリンピックは、一スポーツを通して心身を向上させ、さらには文化・国籍など様々な差異を超え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって理解し合うことで、平和でよりよい世界の実現に貢献する」ことをオリンピックの精神（オリンピックイズム）とし、世代や国境・人種の垣根を越えて各競技（スポーツ）の裾野を拡げていったのでした。

オリンピックの理想を示す言葉として用いられる「参加することに意義がある」というフレーズは、男爵が思い描いたオリンピック精神だといえます。

また、オリンピックのシンボルマークとして知られる五輪の五色（青・黄・黒・緑・赤）と地色の白を加えると国旗のほと



物事には始まりあり その想いを受け継ごう

などを描くことができ、世界の団結が表されていくといえます。

多くの選手は、自分の技や力を世界で試すことと、競技を通して世界平和の懸け橋になることに、競技者としての誇りと矜持を見出し、真剣勝負の場に臨んでいるのでしょう。その上で周囲のサポートや観戦者の声援を力に変え、過酷な予選を勝ち抜き、オリンピックアンとして晴れの舞台に立つことが許されるのです。

「功の成るは成るの日に成るに非ず。蓋（けだ）し必ずよつて起る所あり」という先人が残した言葉があります。

物事の成功は、一日で成し遂げられるものではなく、その裏には積み重ねてきたものがあり、忘れてはいけないという意味です。スタート地点（物事の始動時）には必ず先人や功労者、そして、その場を作り上げていった当事者たちの苦労や思いが詰まっています。

全世界が注目するオリンピックの開会式では、各国の代表団入場、オリンピック讃歌奉唱、聖火点火などの華々しいセレモニーを目にすることが出来ませんが、「今・ここに至る」までを築き上げてきた関係者各位にも改めて敬意を示したいものです。

翻って私たちの「今、この目に映る」物事にも始まりがあり、かかわる人々の想いを私たちは受け継いでいます。自社の社史をたどるなど、今昔物語に触れることは、所属する組織で心豊かな生活を送る上で、とても大切なことなのです。